

令和 3 年 6 月 7 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K21497

研究課題名(和文)日本＝中国間における戒律思想交流の研究

研究課題名(英文)A Study of the Exchange of Preceptual Thought between Japan and China

研究代表者

大谷 由香 (OTANI, Yuka)

龍谷大学・文学部・准教授

研究者番号：50727881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：鎌倉期における日宋間における頻繁な交流が、両国の戒律学に多大な影響を与えていたことが明らかとなった。このことは長らく「仏教東漸」と言われてきた歴史観を覆すものである。少なくとも東アジア仏教界においては、各地域の僧侶がコミュニケーションの場を求め、相互に意見交換し、それぞれの地域仏教の教学形成にその情報を役立てていた。他の文化事象についても同様の視点を考慮する必要があるだろう。

また南都においては、鎌倉期に流入した新しい生活基準は、すでに奈良時代に実現されていたと認識されており、戒律復興はそのまま「かつての日本仏教」の復興事業と重なる。鎌倉期の南都をとらえる新視座を提供できたと考えている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

鎌倉期の日本仏教は、宋国の影響を多大に受けており、それは一定の「宗旨」に偏るものではないことが明らかになった。宋国仏教の情報は宗旨を超えて共有された。例えば布薩は、泉涌寺俊ジョウが紹介した宋国で実践されていた儀礼を参考として、南都で鑑真来朝以来の儀礼として復興されることとなる。2021年2月15日には再び唐招提寺で布薩行事が復興されたが、この時も申請者が紹介した泉涌寺に伝わる儀礼作法と唐招提寺に伝わる儀礼作法とが比較参照されている。

こうした時代の特色は、同時代に花開いた「鎌倉新仏教」もまた、当初は地域や宗旨に固定されず、同時代の僧侶間の融合的な関係のなかで誕生した可能性を示唆する。

研究成果の概要(英文)：It is clear that the frequent exchanges between Japan and the Sung during the Kamakura period had a profound influence on the precepts of both countries. This overturns the historical view that has long been known as the "Eastward Expansion of Buddhism. At least in East Asian Buddhist circles, monks in each region sought out opportunities for communication, exchanged opinions, and used the information to formulate their own regional Buddhist doctrines. The same perspective should be taken into account for other cultural events.

In addition, in the southern capital, it is recognized that the new standards of living introduced in the Kamakura period had already been realized in the Nara period, and the revival of the precepts directly overlaps with the revival project of "former Japanese Buddhism. I believe that I have been able to provide a new perspective on the southern capital during the Kamakura period.

研究分野：仏教学

キーワード：戒律 日本仏教 南山宗 律宗 泉涌寺 対外交流

1. 研究開始当初の背景

対外交流に関する歴史研究が進達することにより、海商の発達によって日本中世における日本 = 中国間の僧侶の直接交流が盛んになったことが明るみになった。僧侶は商船に便乗して自由に日中間を往来し、日本僧は現地で寺院生活を送りながら中国の最新の仏教学を学び、また多数の中国僧が日本を訪れて日本僧を直接指導した。それまで海商に委託した質問状「唐決」のやりとりによってしか仏教教学上の疑問点を解消しえなかった日本僧が、直接中国僧と対峙して仏教実践を共有できるようになった功績は大きい。

以上のような海上交通の隆盛にともなう頻繁な日中交流は、日本既存の仏教思想に多大な影響を与えたと考えられるが、日中仏教交流の成果は、新来宗教としての「禅宗」に偏って報告されてきた。またこうした交流は、中国から日本への一方的な影響関係のみがこれまで想定されており、辺境国である日本の仏教思想が中国へ逆輸入されることは、まったく想定されてこなかったと言ってよい。

2. 研究の目的

本研究では、これまであまり注視されてこなかった「戒律」に焦点を当て、日本・中国の交流が、両国間の戒律思想にどのような影響を与えたのかについて明らかにすることを目的とした。

申請者は、泉涌寺開山の俊苧（1166-1227、入宋：1199-1211）が入宋留学からの帰国直前に閲覧した戒律に関する53箇条の問いが、日本天台独自の円戒思想に基づいたものであったことを申請時までには明らかにしていた。この俊苧の意見が①中国側に受け入れられたか否か、②中国側に評価された俊苧の説が、日本国内においても採用された可能性はあるか、を検討する。

3. 研究の方法

①については、俊苧帰国後20年を過ぎて後に、彼の53箇条の問いに回答を作成した鉄翁守一（1182-1254頃？）の著作が現存しているため、その内容を精査することである程度ことが判明する。なお守一は同門の上翁妙蓮（1182-1262）と論争したことが知られている。妙蓮の著作もいくつか現存しており、内容を確認することができる。

②については、日本天台の円戒思想を批判していた南都律宗の教学が、俊苧帰国後に影響を被り変化している可能性が考えられる。俊苧帰国後の南都では戒律復興運動が活発化しており、その教学的根拠を見直す必要があるだろう。

なおいずれも現在の研究状況においては史料が存在せずに明らかにできないということはないが、申請者は寺院調査に積極的に関わる立場を有するので、新しい史料が検出できれば、都度学界に紹介して、研究に資することとした。

4. 研究成果

日本は鑑真（688-763、来日：753）来朝以来、『四分律』にもとづく受具足戒によって僧侶の資格を得るといふ、いわゆるグローバル・スタンダードに従っていたが、最澄（767-822）は、これを小乗戒であると批判した。彼は大乘戒の理念から『梵網經』にもとづいた受菩薩戒によって僧侶の資格を得る方法を主張し、後に比叡山には、受菩薩戒による僧侶の生成のための戒壇が設置された。以後、日本は僧侶となるための資格手順においてダブルスタンダードを保持することとなった。

南宋留学前の俊苧は、日本天台を中心に研究を進める一方で、筑紫観世音寺において『四分律』にもとづく受具足戒を経て僧籍を得た。研究と実践の乖離に悩む真摯な僧侶は、解決の糸口をつ

かむために商船に乗って中国を目指したと考えられる。

彼は南宋国において律（南山宗）・禅・教（天台宗）を普く学び、帰国の直前に53ヶ条の質問状を、律の専門家である南山宗僧に回覧している。これは日本天台独自の円戒思想にもとづくもので、三聚羯磨による菩薩戒の受戒によって、菩薩・比丘（正式な僧侶）の両性が円満に具わるはずであるのに、なぜ南山宗では白四羯磨による具足戒の受戒を推奨しているのか、という主張に貫かれており、おそらくはそれまで受菩薩戒による比丘性の獲得についてなど考えたこともなかった南山宗僧たちを困惑させた（成果「入宋僧俊苾を発端とした日宋間「円戒体」論争」）。

中国側への影響

南宋代南山宗の僧侶たちが、俊苾が展開する全く異なる立場である天台学からの批判を受け入れたのは、北宋期に南山宗を復興した允湛（1005-1061）・元照（1048-1116）などの中興祖がいずれも天台教学に基軸を置く学僧であったために、南宋代にいたるまでに、天台教学と南山教学がある程度混同されていたという事情があった。俊苾の問いは、天台教学と南山教学の異同を問う、南宋代南山宗の僧侶にとっては耳の痛い議題でもあったのだろう（成果「南山三観と日本律宗」）。

南山宗僧である守一は俊苾の帰国後に、彼の問いへの回答を作成した。これは『律宗問答』には収められていない。俊苾の問いへの回答は、守一の著作である『終南家業』上巻部分全体に該当する。また中・下巻部分は、名だたる学匠に教学的な喧嘩をふっかけた（と守一は思っている）俊苾を慕って、同じく様々な学匠と守一が行った論争を中心として、自らの主張が説かれる構成になっている。守一は俊苾の問いを通して自身の教学を構築していったとみることが可能である。彼は俊苾の主張に全面的に賛同の意を示しており、南山宗と天台宗を同一視するような戒律解釈を提示した。このため伝統的な律宗としての南山宗の立場をまもろうとする学僧たちと頻繁に論争を行うことになった（成果「南宋代南山宗論争の経緯と論点」）。

このように俊苾の問いは、中国南山宗の教義変革を内部から訴える者が出現するほどのインパクトを中国側に残したのであった。このことは東アジア仏教が、東漸するのみならず、相互にコミュニケーションをとりながら各地域で成熟していった可能性を示唆するもので、他の宗教・文化の流転を考察する上でも重要な視点を提示できたと自負している。

日本・南都側への影響

日本天台に伝わる円戒思想にもとづいた問いを回覧した俊苾は、大きな批判を受けることなく帰国した。南都仏教界で律宗復興運動を牽引していた貞慶（1155-1213）は、弟子戒如（生没年不詳）を帰国した俊苾のもとへ遣わし、持律生活に関わる律典の語義解釈を求めたと伝わる。俊苾の12年間における南宋寺院生活は、そのまま釈尊時代の僧伽生活を伝えるもの「如法の生活」として、僧侶たちの憧れを集めた。俊苾の帰国後に貞慶は興福寺に戒律研究機関である常喜院を建立して、戒律研究を本格化させ、俊苾は泉涌寺を賜り、当地で南宋寺院生活を再現した。貞慶を通じて、その生活は南都・海龍王寺で実践されたと考えられる。

さて貞慶は南都において新羅僧太賢『梵網經古迹記』を基本とした『梵網經』研究を始めた最初ではないかと推測される（成果「太賢『梵網經古迹記』の日本における活用について」）。『古迹記』は最澄や安然（841?-951-?）が、円戒思想の根拠として使用してきた著作であり、最澄が円戒を主張し始めて以来、本書をライバル関係にあった南都側が引用して戒律解釈を行ったのは、貞慶が初めてであろう。貞慶は、その著作『心要鈔』において「戒」を説明するにあたり、『古迹記』を全面的に引用して、一分受や利他のための破戒、一得永不失などを肯定する姿勢を明らかにしており（以上の考えは天台円戒独自の姿勢と考えられていた）、日本天台の円戒義を

南都に導入する下地を整えたとも考えられる（成果「日本仏教における戒律の特異性」）。

文暦2年（1235）、菩薩のリーダーである文殊菩薩の化身とされた行基（668～749）の御廟が掘り起こされ、舍利が出現した。行基舎利の発掘は菩薩による仏教社会の再興を行う時機の到来を告げる象徴的な出来事であったと考えられる。

覚盛（1194-1249）・叡尊（1201-1290）ら4名によって、東大寺羅索院にて自誓受戒が行われたのは、行基舎利の発掘の翌年であった。このときの自誓受戒が各自に行われたのではなく、4名を揃えて行われたのは、4名で初めて僧伽が成立するからであろう。彼らは行基時代のような、菩薩比丘が牽引するあるべき仏教社会を当時に蘇らせようとしたものと考えられる（成果「中世律宗復興の中の行基」）。

さて彼らが行った「自誓受戒」は、以後南都では通受と呼称される。これは三聚羯磨による受菩薩戒によって菩薩と比丘の両性を得るというもので、結果的にこれまで南都が批判していた日本天台の円戒思想にもとづいた受戒法に異なる。

俊苧は帰国後、南宋国で行われていた受戒が三師七証を揃えて白四羯磨作法で行われていたのに接し、同じ受戒法を泉涌寺に再現しようとしたが、師となる比丘の育成のために、まずはそれまで日本天台に伝持されてきた円戒思想にもとづく自誓受戒によって、あるべき比丘を生成したと伝わる。すなわち俊苧は、自身が回覧した問いに対して、南山宗からの批判がなかったことを受け、三聚羯磨による受菩薩戒によっても、比丘の立場を得ることができると判断し、帰国後の日本で実践していた。この方法が南都でも試みられたのである（成果「入宋僧俊苧と南都戒律復興運動」）。

覚盛の提唱する「通受」は、受戒法としては、最澄以来ライバル関係にあった比叡山に伝わる受戒法と同じである。しかし覚盛はその受戒法が、南都に古来から伝わる教学体系によって正統性を担保することができる作法であることを説明している。本来あるべき寺院生活を行うための根拠となる教学は、奈良時代以来南都に伝わってきた書物などを典拠として展開された（成果「南都律宗における宋代新潮仏教の流入と復古」）。一方で行事や作法などの寺院生活は、南宋国で行われていたものが大いに参照されて、奈良時代の本来あるべき生活が、入宋僧の助けを借りながら復興されていったと実感されていたであろう。布薩などの行事もこの頃南都で復興される（成果「唐招提寺蔵『布薩規要記』」）。

東大寺戒壇院が律院として復興し、凝然（1240-1321）が教学復興に取り組むようになると、「通受」の理論はすでに奈良時代に完成されていて、覚盛の活躍は、まさにその復興であったという理解に落ち着くようになる。凝然は東大寺戒壇院が律院化されるに伴い、東大寺律宗の復興に取り組む一環として、華嚴学の研究に勤しんだ（成果「凝然の華嚴学と律宗」）。律宗は奈良時代に行基が牽引した仏教社会こそ理想的であったと信じ、それを体現しようとしたものと考えられる。東大寺戒壇院上の塔も、こうした状況下において釈迦・多宝二仏が並座する多宝塔へと変更されたと考えられる（成果「東大寺戒壇の「塔」」）。

さて凝然の同門である真照（?-1254-1277-?）は、1260～1263年にかけて南宋留学を遂げており、その時には前述の守一の対論者である妙蓮に師事した。妙蓮は律宗としての南山宗を堅持しようとする立場の学僧であり、凝然はその姿勢こそが南山宗の正統であると評している。守一と妙蓮の論争は、日本僧がリアルタイムでその経緯を見守ることができた論争だったと考えられ、守一・妙蓮どちらにも日本僧が師事したことが知られている。妙蓮を正統とすることで、南都律宗の教学の方向性を定めるとともに、天台教学との一線を引くことが意識されたものと考えられる（成果「日宋交流と鎌倉期律宗義の形成」）。

以上のように、日宋交流は両国の戒律をめぐる状況を攪拌し、それぞれに影響を与えた。他の

文化事象についても同様のことを想定する必要があるだろう。

なお研究成果の一部は、寺院や一般に向けて講義を行い、社会還元に努めた。具体的には唐招提寺・泉涌寺・清浄華院・本願寺などの本山研修会などで求めに応じて研究成果を報告し、一般市民講座や YouTube、私塾などでも同様に研究成果をわかりやすく説明している。2021年2月15日には、講義を踏まえて唐招提寺で布薩行事の復興が行われた。研究成果の一部は、智山勧学会賞・護法会賞などを受賞した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 -
2. 論文標題 唐招提寺蔵『布薩規要記』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 覚盛上人御忌記念 唐招提寺の伝統と戒律	6. 最初と最後の頁 391-462
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 -
2. 論文標題 南山三観と日本律宗	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 覚盛上人御忌記念 唐招提寺の伝統と戒律	6. 最初と最後の頁 27-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 -
2. 論文標題 新善光寺所蔵「宋・了然『釈門帰敬儀科釈』」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 泉涌寺所蔵の中・近世史料に関する基礎的研究（東京大学史料編纂所研究成果報告2019-1）	6. 最初と最後の頁 115-200
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 84
2. 論文標題 日本仏教における戒律の特異性	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本佛教学會年報	6. 最初と最後の頁 76-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 492
2. 論文標題 太賢『梵網經古迹記』の日本における活用について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 龍谷大学論集	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻
2. 論文標題 南宋代南山宗義論争の経緯と論点	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 佛教の心と文化 (坂本廣博博士喜寿記念論文集)	6. 最初と最後の頁 371-399
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 67
2. 論文標題 日宋交流と鎌倉期律宗義の形成	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 智山学報	6. 最初と最後の頁 177-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 OTANI Yuka	4. 巻 66 - 3
2. 論文標題 The Controversy Over the Nanshan Vinaya School in the Southern Song and Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 1162-1168
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 14
2. 論文標題 入宋僧俊ジョウを発端とした日宋間「円宗戒体」論争	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本仏教総合研究	6. 最初と最後の頁 105-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 65-2
2. 論文標題 入宋僧俊ジョウと南都戒律復興運動	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 605-611
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 野呂靖, 芳澤元, 大谷由香, 高橋悠介	4. 巻 66-2
2. 論文標題 室町期の南都仏教 東大寺戒壇院志玉とそのネットワーク	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 238-239
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻
2. 論文標題 東大寺戒壇の「塔」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東大寺の思想と文化 (東大寺の新研究3)	6. 最初と最後の頁 95-131
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 18
2. 論文標題 中世律宗の復興の中の行基	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 論集東大寺と行基菩薩（ザ・グレイトブッダ・シンポジウム論集）	6. 最初と最後の頁 101-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻
2. 論文標題 凝然の華嚴学と律宗	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 凝然教学の形成と展開（唐招提寺第二十八世凝然大徳御忌記念）	6. 最初と最後の頁 35-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 71
2. 論文標題 室町期の「浄土真宗」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学 宗教・文化研究所だより	6. 最初と最後の頁 2-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大谷由香	4. 巻 71
2. 論文標題 南都律宗における宋代新潮仏教の流入と復古	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 説話文学研究	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計26件（うち招待講演 20件 / うち国際学会 8件）

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 南都における宋代新潮仏教の流入と復古
3. 学会等名 説話文学会「律をめぐる宗教的環境と説話文学との架橋」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 俊ジョウ五十三問の日中両国への波及
3. 学会等名 印度学仏教学研究学会第70回学術大会（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 中世律宗復興の中の行基
3. 学会等名 第18回ザ・グレート・ブッダ・シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 越境的佛教 - 關於13世紀日中戒律思想的の共享 -
3. 学会等名 The 7th Symposium on Humanistic Buddhism（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 東アジアにおける南山宗教義の趨勢と凝然
3. 学会等名 日中国際シンポジウム「東アジア仏教思想史の構築 - 凝然・明恵と華嚴思想 - (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 俊ジョウ帰朝以前の「布薩」について - 法進『東大寺授戒方軌』附属の三つの布薩作法をめぐって -
3. 学会等名 鎌倉ぼんくら会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 泉涌寺俊ジョウの帰国と布薩
3. 学会等名 御寺泉涌寺定例講習会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 室町期の「浄土真宗」
3. 学会等名 京都女子大学宗教・文化研究所主催公開講座 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 唐招提寺布薩の歴史 第一講：泉涌寺俊ジョウの帰国と布薩 第二講：唐招提寺蔵『布薩規要記』と布薩行儀
3. 学会等名 律宗戒学院講習会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 唐招提寺布薩の歴史 第三講：唐招提寺の布薩行儀
3. 学会等名 律宗戒学院講習会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 東大寺戒壇上の塔の改変と日本律宗教学
3. 学会等名 BARC日本仏教の形成と展開「戒律の思想と儀礼文化」（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 13世紀日本中国間における戒律思想の共有
3. 学会等名 日中三大学研究発表会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 日本仏教における戒律の特異性
3. 学会等名 日本仏教学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 日宋交流と鎌倉期律宗義の形成
3. 学会等名 第61回智山教学大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 大安寺教学とその系譜
3. 学会等名 大安寺歴史講座vol.7第1回（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 中世後期の「浄土真宗」と清浄華院
3. 学会等名 向阿忌記念講演（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 日本の布薩 / 唐招提寺の布薩
3. 学会等名 律宗戒学院青年会布薩講義 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 空有論争と大安寺
3. 学会等名 大安寺歴史講座vol.7第2回 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 南宋代の南山宗義論争と日本
3. 学会等名 第68回印度学仏教学会 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 志玉口述『梵網古迹下巻聞書』にみる室町期戒壇院の戒律思想
3. 学会等名 第68回印度学仏教学会 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 中世大安寺の復興
3. 学会等名 大安寺歴史講座vol.7第3回（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 太賢『梵網經古迹記』の活用と伝存状況
3. 学会等名 東国大学ABC事業団・仏教文化研究院2017年秋季国際学術大会「韓国仏教文研の拡張性とデジタル地形図」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 南山宗の三観について
3. 学会等名 東アジア仏教研究会年次大会（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 入宋僧俊ジョウと南都戒律復興運動
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第67回学術大会（国際学会）
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 南宋代南山宗義論争の日本的受容
3. 学会等名 龍谷大学仏教学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大谷由香
2. 発表標題 日宋交流と「浄土真宗」 親鸞から蓮如まで
3. 学会等名 本願寺総合研究所若手勉強会（招待講演）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 西谷功・大谷由香・高橋慎一郎・佐藤雄介・林晃弘	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学史料編纂所	5. 総ページ数 200
3. 書名 泉涌寺所蔵の中・近世史料に関する基礎的研究（東京大学史料編纂所研究成果報告2019-1）	

1. 著者名 大谷 由香	4. 発行年 2017年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 412
3. 書名 中世後期 泉涌寺の研究	

1. 著者名 宋原永遠男・佐藤信・吉川真治編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 632
3. 書名 東大寺の思想と文化（東大寺の新研究3）	

1. 著者名 一般財団法人 律宗戒学院	4. 発行年 2019年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 474
3. 書名 覚盛上人御忌記念 唐招提寺の伝統と戒律	

1. 著者名 GBS実行委員会	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 168
3. 書名 東大寺と行基菩薩	

1. 著者名 一般財団法人律宗戒学院	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 462
3. 書名 唐招提寺第二十八世凝然大徳御忌記念 凝然教学の形成と展開	

1. 著者名 坂本廣博博士喜寿記念論文集刊行会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 山喜房佛書林	5. 総ページ数 1138
3. 書名 坂本廣博博士喜寿記念論文集 佛教の心と文化	

〔産業財産権〕

〔その他〕

デコボン書房 http://gachaping.blog29.fc2.com/

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中国	中国人民大学	北京大学	中央民族大学	
韓国	東国大学校			
米国	ハーバード大学	南カリフォルニア大学		
その他の国・地域	台湾・仏光山寺			